

第 2 表 狭い地域内の地中温度のちがい (その 2) °C

3 月 の 場 合										5 月 の 場 合									
日	観 測 区 番 号								Max -Min	平均	日	観 測 区 番 号						Max -Min	平均
	1	2	3	4	5	6	7	8				1	2	3	4	5	6		
13	14.4	15.1	14.3	14.3	14.9	15.3	14.5	14.6	1.0	14.67	15	19.2	18.7	19.8	18.0	19.9	20.6	2.6	19.36
14	14.2	14.4	14.3	14.2	15.2	14.8	14.2	14.5	1.0	14.47	16	20.0	19.7	20.5	19.0	20.6	21.1	2.1	20.15
15	9.7	9.8	9.4	9.4	10.0	9.9	9.5	9.5	0.6	9.65	18	18.0	17.8	17.9	17.8	18.2	18.0	0.4	17.95
16	8.7	8.8	8.3	8.5	8.7	8.6	8.4	8.6	0.5	8.60	19	20.5	20.2	21.2	19.6	21.3	21.5	1.9	20.21
17	14.3	14.1	13.7	13.5	14.4	14.5	13.5	14.0	1.0	14.00	20	21.0	20.6	21.5	20.1	22.1	22.5	2.4	21.30
18	15.4	15.2	15.1	15.0	15.4	15.6	14.9	15.3	0.7	15.20	21	19.5	19.0	19.7	18.9	19.7	20.0	1.1	19.70
19	12.4	12.3	12.0	12.0	12.4	11.3	11.9	12.2	0.5	12.20	22	20.5	20.4	21.1	19.4	21.2	21.9	2.5	20.75
20	10.2	9.9	9.6	9.5	10.0	9.7	9.4	9.6	0.3	9.72	23	18.3	17.7	18.3	17.0	18.3	19.0	2.0	18.10
21	9.8	10.0	9.6	9.9	9.9	9.9	9.7	9.8	0.4	9.73	24	18.5	18.5	19.3	18.1	19.7	20.0	1.9	19.01
22	14.1	14.7	13.4	12.8	13.8	14.0	13.0	13.8	1.9	13.70	25	16.9	17.1	17.2	16.6	17.0	17.0	0.6	16.96
23	10.4	10.3	10.0	9.9	10.3	10.3	10.1	10.4	0.5	10.21	26	16.5	16.2	16.7	16.1	16.6	16.2	0.6	16.38
24	14.5	14.7	14.3	13.8	14.8	14.6	13.7	13.9	1.1	14.28									

No. 7, 3 の温度計は都合で撤去した。

差は3月においては0.3~1.1°C, 平均0.83°Cであり, 5月においては0.4~2.6°C 平均1.65°Cである。いずれの場合も最高及び最低を示す区は, だいたい一定の傾向が認められるようになってい。またこれら毎日の観測値について Tompson の棄却検定を行うと, これらの値はどれも, 95%以上の確率にて現われる可能性のある値である。すなわちこの 6m² の地域の地中温度はだいたい一定の値のものともみなすことができる。しかしながら各区の観測値の差は, 気温の高い日ほど大である傾向が認められ, 夏季のもっと気温の高い場合, 地表のように日較差の大きいところでは, さらにこの差は大になるのではないかと考えられる。

N さらに岡田一次氏等は細かい目のふるいでふるいかけた土壌を, 注意して測定させた試験区 1m の間に, 10 cm 間隔に配列した曲管地中温度計で, 深さ 5 cm の

地中温度を毎日 10時に観測して, 毎日の観測値の最高及び最低の差が 0.3°C であるという結果を得ている。(未発表)

以上の結果からみると, 曲管地中温度計によって観測した, 普通の畑地などの地中温度は, その地点の温度を示すものではあるが, 農業気象の立場などから我々が普通にほしがるところの, 相当広い範囲にわたる代表的, または平均的な地中温度とはいいがたいようである。我々には普通には後に記したような地中温度が観測できるならば, 多少の時間的な示度のおくれなどは問題とならないことが多く, この点にも農業気象用測器の問題が残っているといえよう。

この観測は昭和 22 年に行ったもので, 第 1 回の観測は主として山中啓利氏が, 第 2 回の観測は主として落合次郎氏が担当された。(中央気象台)

書 評

気候学集報 2—気候学関係文献目録—

B 5—46 頁, 1954 年 5 月, 150 円

東京教育大学地理学教室内気候談話会

最後にこの 1 年間の候気談話会の活動状況と学界の動きが記事として 1 頁附け加えられている。気候学に関心を持つ研究者, 特に隣接学問の研究者や地方在住の研究者に便利である。

(28 頁からつづく)

たようなビショップ環に類した光学現象も現われているといわれていることであるから水爆による凶作の可能性は今もなお存在しているものと考えられる。われわれは 5 月の気象学会の総会で水爆禁止の決議を行ったのであるが, この決議をさらに強固にするための資料による裏付けは今最も要望されていることと思う。この小論が多数の方の討論の対象となり, そのための小さな足がかりとなり水爆禁止の運動の一助にでもなれば幸いと思う。終りにいろいろと御検討下さった予報研究室の方々に感謝する。(気象研究所)